



自宅で録音作業をする大谷さん。自動の活字読み上げソフトなども、積極的に採用している（東京都内で）

この「声」を 待つ人がいる

都 内マンションの一室。大都会の中心部でも、窓を締めきれば、外の喧騒はほとんど聞こえない。それでも「音訳中、救急車が通りかかったりすれば、もう一度最初からやり直し」と、大谷のぶ子（63歳・眞武分教会教人・東京都中央区）は苦笑いを浮かべる。

40年ほど前、息子の通う保育園で「朗読劇がある」という話を聞き、軽い気持ちで足を運んだ。そこで、音訳グループ「いとでんわ」と出会う。

当時は、二人の幼子を育てる身。「家に閉じこもっているより、何か始めてみたい」。サークル内にお道の教友がいたこともあり、すぐに仲間入りした。「私は、読み方が下手だね。指導者泣かせ、だったと思う。でも面白かったし、途中で辞めるのは格好悪いと思って。気づいたら長く続けていた。おかげで指導する際は、うまく読めない人の気持ちがよく分かる」

いまでは、サークルの一切を取り仕切る傍ら「点字文庫」で録音された音声の編集作業に携わったり、親里で行われる講習会の講師を務めたりしている。

「いとでんわ」は、勉強会開催などのほか、視覚障害者の依頼に応じて、さまざまな書物を音訳している。厚さ5センチはある数学の問題集、500ページに及ぶ野鳥の図鑑……。メンバーで分担しても、半年がかりになることも少なくない。それでも「その人が必要としているものを音訳させていただくのが一番。基本的にどんな依頼も断らない」という姿勢は崩さない。

目指すのは「読み手を意識させない音訳」だ。

「聞いた後、読み手の性別も思い出せないような音訳。人が読んだのを聞いたのではなく『自分で読んだ』ように感じてもらえる音訳。なかなか難しいけれど……」

大谷には、大切に胸にしまっている言葉がある。音訳と出合って20年ほど経ったところ、親里で行われた講習会で耳にした話だ。

「いまの自分にできる最高のものを親神様・教祖にお供えすることが大切。だから『やってあげている』と思ったり、利用者に感謝を求めたりするのは筋違いだ」

この話を聞いたとき「実家の両親が、畑で作った野菜の中で最も出来の良いのを選んで、いそいそと所属教会へお供えに行っていたのを思い出した」。

以来、常に「お供えの精神」を心に置いてきた。天理や地元での講習会の際には、そうした話を伝えている。

※天理時報 2013年7月28日号より。記事の内容等は掲載当時のものです。